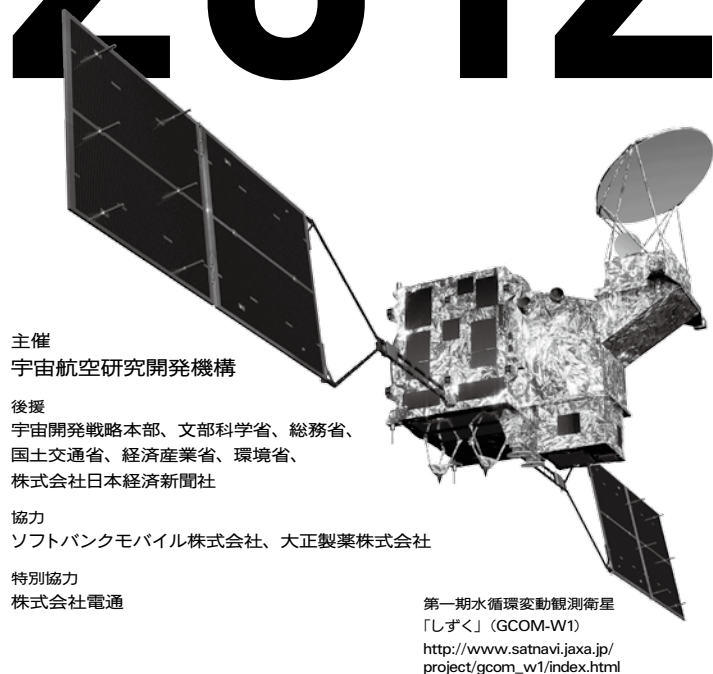


宇宙利用 ミッシェン シンポジウム 2012

役立つ宇宙！

衛星利用が拓く私たちの未来



主催
宇宙航空研究開発機構

後援
宇宙開発戦略本部、文部科学省、総務省、
国土交通省、経済産業省、環境省、
株式会社日本経済新聞社

協力
ソフトバンクモバイル株式会社、大正製薬株式会社

特別協力
株式会社電通

第一期水循環変動観測衛星
「しずく」(GCOM-W1)
[http://www.satnavi.jaxa.jp/
project/gcom_w1/index.html](http://www.satnavi.jaxa.jp/project/gcom_w1/index.html)

人工衛星利用で安心・安全な社会を

第1部



第1部の 来賓ならびに講演者(登壇順)



立川敬二氏
JAXA 理事長



古川元久氏
宇宙開発担当相



森口泰孝氏
文部科学省事務次官



本間正修氏
JAXA 理事
宇宙利用ミッション本部長



中川敬三氏
JAXA
GCOMプロジェクトマネージャ



鈴木和哉氏
国際協力機構 (JICA)
地球環境部 計画・調整課長



五味 淳氏
JAXA
衛星利用推進センター長



松澤 裕氏
環境省 地球環境局 総務課
研究調査室長



佐々木もよこ氏
司会

上げから1年半ほどが経過し、現在JAXAでは、GPS補完の実験、高精度測位の実験などを担当している。GPS補完実験は2011年度末まで実証実験を続け、来年度には実験成果の検証を終える予定だ。高精度測位実験では、基準点のない洋上や山間部等での水平精度30センチを達成している」と述べ、実験の現状を報告した。

衛星で二酸化炭素を 観測することの意義

第1部最後は、環境省の松澤裕・地球環境局 総務課 研究調査室長による「温室効果ガス観測技術衛星「いぶき」の成果と後継機への期待」。

「いぶき」は、二酸化炭素とメタンガスの濃度分布を専門的に観測する世界で唯一の人工衛星。松澤氏は「いぶき」のように衛星で二酸化炭素を観測する意義として「全球的な観測が可能になる・炭素循環の変動監視・主要な二酸化炭素排出国の排出量推定」などを挙げた。また、後継機開発に当たり「気候変動予測の精緻化、地球変動の早期検出、気候政策への貢献を目指す」として講演を締めくくった。

講演後は再び講演者が登壇。会場参加者からの質疑応答が行われ、第1部は終了した。



第2部

第2部の トークセッション登壇者

司会
佐々木もよこ氏



毛利 衛氏
日本科学未来館館長、
宇宙飛行士



増山昭博氏
海上保安庁海洋調査部
海洋調査課



後藤健太郎氏
特定非営利活動法人
OWS



戸田勝昭氏
東京都立第一商業高等学校
校長



館 和夫氏
JAXA 宇宙利用ミッション本
部事業推進部長



中川敬三氏
JAXA
GCOMプロジェクトマネージャ

地球を健康に保つという 役割が衛星にはある

第2部では、はじめに日本科学未来館館長で宇宙飛行士の毛利衛氏が「宇宙から学ぶ」と題し講演を行った。

講演の中で毛利氏は、アラル海の表面積が減少していく衛星写真を紹介しながら「私たち人間は風邪をひいたら診察や検査を受けて健康を保つが、それは地球も一緒だ。地球という生命の健康を守るためには、私たちが地球をよく知ることが大切だと思う。地上からだけではなく宇宙からも地球の様子を観察するという時代に入っており、それに欠かせないのが衛星だ」と人工衛星による地球観測の重要性を説明した。

が身近なところで利用されている事例が、それぞれ紹介された。

ディスカッションでは、後藤氏による海洋環境保護に関する衛星への期待、司会の佐々木氏によるお天気レポーターならではの気象衛星に関する疑問、会場参加者からの衛星の農業利用に関する質問が出るなど、和やかな雰囲気ながらも活発な議論が繰り広げられた。

最後に毛利氏が「私が宇宙に行って感じたのは、地球にはまだまだ美しいところがあるということ。美しいところを保つにはどうすればいいか、またそうでないところを美しくするにはどうしたらいいのかという発想が大切だ。そして、そのために人工衛星は重要」と語り、シンポジウムは幕を閉じた。

人工衛星利用の 身近な事例

続く「役立つ宇宙」をテーマに行われたトークセッションには、毛利氏に加えて、海上保安庁海洋調査部・海洋調査課の増山昭博氏、特定非営利活動法人・OWSの後藤健太郎氏、東京都立第一商業高等学校校長の戸田勝昭氏、JAXAの館和夫・宇宙利用ミッション本部事業推進部長、JAXAの中川敬三・GCOMプロジェクトマネージャらが参加した。

冒頭、「みちびき」が撮像した地球画像を用いた制服が発表され、戸田校長からは、宇宙と制服のコラボレーションの目的などが紹介された。

その後、増山氏からは海水を観測した衛星データが船舶の安全な航行に役立てられている事例、後藤氏からは「北限域の造礁サンゴ分布調査」や「海洋環境保護」などの同NPOの活動、中川氏と館氏からは、衛星



衛星利用が拓く 私たちの未来

「宇宙利用ミッションシンポジウム2012」役立つ宇宙！衛星利用が拓く私たちの未来」(主催：宇宙航空研究開発機構、以下、JAXA)が2012年2月27日、東京・千代田区の秋葉原コンベンションホールで開催された。

シンポジウムはタレント・佐々木もよこ氏司会のもと、第1部と第2部に分けて行われ、それぞれ多数の来場者が詰めかけた。

冒頭、JAXAの立川敬三理事長は「最近、JAXAの宇宙利用は災害対策や環境問題対策を目的とした衛星を開発している。これらの衛星がどう役立っていくのかをこのシンポジウムでお伝えしたい」と挨拶した。次いで来賓の古川元久・宇宙開発担当相が「国民が宇宙をより便利に

活用できるような環境を作りたい」と、森口泰孝・文部科学省事務次官が「人工衛星の利用は安心で安全な社会を作るために重要なものだ。一般の方々には、こういったシンポジウムを通じて、衛星利用の重要性を理解してほしい」と挨拶した。

第1部の講演に先立ち、JAXA理事の本間正修・宇宙利用ミッション本部長から、同本部における活動の3つの柱である「地球環境問題プログラム」「災害監視・通信プログラム」「衛星測位プログラム」が紹介された。

水循環変動観測衛星「しずく」の役割

最初の講演は、JAXAの中川敬三・GCOMプロジェクトマネージャ。中川氏は「しずく」(GCOM-W1)の打上げに向けて」と題した

JICA事業における 人工衛星の利用

講演の中で「今年上げを予定している第一期水循環変動観測衛星「しずく」は高性能マイクロ波放射計2(AMSR2)を搭載し、海面水温や降水量、積算水蒸気量などの水に関する観測を実施する。そこで得られた観測データは、地球環境問題の象徴ともいえる北極海水の観測、海面水温で魚群把握することによる漁業の効率化など、我々の生活にも密接に役立つ」と「しずく」の役割を強調した。

次に登壇したのは独立行政法人国際協力機構(JICA)の鈴木和哉・地球環境部計画・調整課長。「JICA事業における人工衛星利用と今後への期待」を演題に行われた講演で「JICA事業における人工衛星利用の中心は地球観